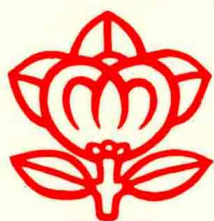


児童文学の散歩道

安藤美紀夫



玉川選書

幼少年時代にふれあった文学作品
数。心のふるさとを求めて語る、
文学者の半自叙伝。

人と研究シリーズ

安藤美紀夫

児童文学の散歩道

(玉川選書)

玉川大学出版部 1977

176pp. 19cm

安藤美紀夫 ANDO Mikio

1930年、京都市生れ。京都大学文学部イタリア文学科卒。北海道での18年の高校教師の生活を経て、現在、日本女子大児童学科助教授。

主な著書に『ポイヤウンベ物語』(講談社文庫)、『でんでんむしの競馬』(偕成社)などの創作のほか、『世界児童文学ノート、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(偕成社)、また訳書には、『ピノッキオのぼうけん』(福音館書店)、『マルコヴァルドさんの四季』(岩波書店)、『クオレー愛の学校』(玉川大学出版部)などがある。

現住所 東京都東大和市奈良橋1259—45

児童文学の散歩道

1977年2月15日 第1刷発行 ©

著者 安藤美紀夫

発行者 小原哲郎

発行所 玉川大学出版部 1977

〒194 東京都町田市玉川学園

電話 0427-32-9111

振替 東京 8-26665番

印刷・製本 図書印刷

(分)1395(製)15018(出)4355

乱丁本・落丁本はお取替えします

児童文学の散歩道

まえがき

近ごろ、児童文学への関心は、少くとも私が児童文学に関係しはじめた頃から見れば、けたはずれに高い。私が児童文学に関係しはじめた頃、などというと、ずいぶん古いことのようにであり、私の年齢もかなりのもののように聞こえるかも知れないが、それは、せいぜい二十二、三年前のことにはすぎないのである。

私とはほぼ同年輩の友人の奥さんは、当時、「お宅のご主人は何をやっていたらっしゃるのですか。」と誰かから聞かれて、「児童文学をやっています。」と答えたら、「へええ。男の方でも、そんなことをおやりになるんですか。」といわれたそうである。たかが子どもの本に、大の男が、という考え方が、聞いた人にあつたのだろうか、それは別に特別なものではなく、ごく一般的なものであったのである。

その頃に比べれば、近ごろは、ということである。とはいえ、たかが子どもの本、という考え方は、今もなお一般的には根強く残っていることは、否定できない。その証拠に、というのも変

だけれど、例えば、電車の中で、いい若い者や、大の大人が、活字の大きい挿絵の多い本を読んでみればわかるけれども、必ず奇異な目の一つや二つにはぶっつかることは、うけあっていい。にもかかわらず、一方でまた、児童文学や子どもの本に関心を持つ人たちの層は、着実に厚くなってきている。親子読書や地域文庫の運動のひろがりの中に、それを見ることができるとし、大学における児童文学の講座の増え方や、卒業論文に児童文学をとりあげたり、とりあげたいと思っている人たちの、かなり急速な増加の傾向に照らして考えてみても、それは確かである。

だが、私は、この本で、大上段にふりかぶって、児童文学論を展開するつもりはない。私も、かつては「たかが子ども」であったし、今、「大の大人」である人もそうであった。だとすれば、「たかが子ども」であった時代は、大の大人にとっても重要な意味を持つはずである。そして、そのことがわかった時、「たかが子ども」という認識の間違いにも気づくはずである。児童文学は、そういう基盤の上に成りたっている。

それは、児童文学の書き手の一人でもあり、また研究者のはしくれでもある私の実感である。実感によりかかって、ものをいうことは、客観性を失う危険性を持っている。しかし、実感の背後には、幼少年体験を含むさまざまな体験がある以上、少くとも、児童文学を語る場合、そうした実感をぬぎにした客観性が、逆にすべてを無にすることもある。

今世紀の初めの頃、「たのしい川べ」という、変った空想物語を世界の子どもたちにプレゼン
トしたケネス・グレアムは、「角をまがって、突然、五歳の小さな男の子だった自分と、ぼった
り出あったとしても、決して驚くには当たらない」といった、という。児童文学の創作はもちろん、
その研究の場合にも、こうした実感に共感し得ることが、必要な条件となるだろう。

私とその条件を十分にみたしているかどうかは、はなはだ心もとないけれども、ここでは、そ
うした私の実感を土台にしながら、私と児童文学との接点を探っていきたい。それは、私にとっ
ては一種の宝探しのようなものであり、楽しみであると同時に、不安でもある。その宝探しは、
いってみれば、地図も、長い年月にわたるカレンダーも、ともに、くしゃくしゃにまるめてほう
りだしたような世界へわけいることだからである。実際には遠く離れた土地が、そこでは、隣り
あわせになっているかもしれないし、また、これを書いている一九七六年六月二十日は、あるい
は、一九四〇年十二月二十日の翌日であるかも知れないのである。

とにかく、ぶらぶらと出かけてみるほかはない。

児童文学の散歩道
目次

まえがき	3
------	---

I 思い出す、ということ	11
--------------	----

1 中書島というところ	11
2 見おろす世界・見あげる世界	16
3 原っぱの発想	23

II 遊びと読書	29
----------	----

1 「半分やろ」の桃太郎	29
2 私の心の地図	34
3 けむだし穴の不思議	40
4 一枚の写真	46

III 戦時下の少年時代	53
--------------	----

1 新しい読書体験	53
2 新美南吉と半田と私と	58

IV 児童文学との出会い……………66

1 母の死としらみたち……………66

2 先生、おしっこ！……………72

3 賞金、身につかず……………80

V 京都から北海道へ……………89

1 いまいましい牛乳……………89

2 吹雪の造型……………96

3 「現代イタリア児童文学研究資料」のこと……………103

4 やまべ釣りのみみず……………110

VI 山が小さくなった……………118

1 翻訳することは、裏切ること……………118

2 仮面劇とピノッキオ……………125

3 子どもと自然……………131

4	エトランジェ.....	137
---	-------------	-----

VII	東京というところ.....	143
-----	---------------	-----

1	分と秒と.....	143
---	-----------	-----

2	「でんでんむしの競馬」について.....	148
---	----------------------	-----

3	児童文学と子ども観.....	154
---	----------------	-----

4	子どもの本と、その与え方.....	162
---	-------------------	-----

VIII	児童文学を志す人たちへ.....	169
------	------------------	-----

——おわりにかえて——

I 思いだす、ということ

1 中書島というところ

私が、人生の最初に私の足跡をしるしたところは、中書島であった。もちろん、それは、私の戸籍上の出生地でもないし、具体的な記憶として、私が中書島へ行った最初が、いったいいつで、その時のようすがどうであったか、ということと思いだすこともできない。

にもかかわらず、中書島という地名は、私の思いでの原点のようなところで、今も生きつづけているのである。エーリッヒ・ケストナーは、「わたしが子どもだったころ」の中で、次のようにいった。

「忘れてしまったことは古く、忘れられないことはきのうあったことだ。ものさしは時計ではなくて、価値である。そして、いちばん価値のあるのは、楽しいにせよ、悲しいにせよ、幼年時

代である。忘れられないことを忘れるな！ この忠告は、いくら早く与えても早すぎるということはない、とわたしは思う。⁽¹⁾

だが、ある事実が、その人にとって「忘れられないこと」であるためには、必ずしも具体的な体験の記憶を必要とするわけではない。例えば、私の生れた時の体重が三、〇〇〇グラムであった、というような記憶は、もちろんあるはずがない。しかし、もし、そのことが、その後の私の成長に何らかの大きなかわりを持ったとするならば、その事実は、「忘れられないこと」として、たえず「思いだす」ことになるだろう。

中書島という地名は、そういうものとして、私の中にあるのである。

中書島（ちゅうしょじま）というのは、京都市伏見区の南のはずれに位置するあたりにある。幕末の頃には、宇治川へ通じる水路ぞいに、安芸浅野屋敷、紀伊徳川屋敷、肥後細川屋敷、薩摩島津屋敷、尾張徳川屋敷などが、そのあたりにずらりと並んでいて、寺田屋騒動で有名な寺田屋も、今の京阪電鉄中書島駅から、観光案内風にいえば、徒歩五分ばかりのところにある。寺田屋は、今は舗装された道のそばにあるけれども、もとは、やはり、淀川、宇治川、高瀬川を結ぶ地点の船宿だったのである。

とはいえ、私の中書島が幕末とつながってあるわけではない。そういうことを、知識として知

ったのは、ずっと後のことである。

私は、京都市の生れだが、生れた家は、京都も北の方、上京区に属する下総町であった。今は、北区になっているかも知れない。私の父は、図案家であるとともに、百田宗治の主筆する詩誌「椎の木」の創刊から編集同人として参加していた詩人でもあり、私が生れる前に、すでに第一詩集「大道芸人」を出していた。同じ「椎の木」の同人であった伊藤整が、「雪明りの路」を出したのと、ほぼ同じ頃であった。

父が残したメモによると、私が生れる前年に、母と世帯を持った家は「南京虫が多く」出て、どうにもならなくて下総町へ移ったらしい。調べてみれば、私の出生地は、今ではほとんど見られない、南京虫というきわめて小さな虫によって、動かされたわけである。

「南京虫」半翅目の昆虫。体長約五ミリメートル。円盤状で扁平、翅は退化して小さく、全体赤褐色。頭部は小さく、口は吻状で吸血に適する。アジア南部の原産で、幼虫・成虫ともに室内に棲息し、運動は活発で、夜、人畜から吸血し、激しいかゆみと痛みを起させる。

これは「広辞苑」の記述だが、この虫の襲撃のものすごさは、確かに一人の人間の出生地を変えさせるに値いするものであった。もっとも、私自身が南京虫との決闘を迫られ、その襲撃の執拗さに手を焼いたのは、戦後のことだったけれども。

それはともかく、南京虫との闘いに敗退したわが父安藤真澄は、私が生れた頃、高橋信吉、中原中也などの出会いを持ちながら、次第に詩から遠ざかっていったらしい。百田宗治の呼びかけにもかかわらず、第二次「樵の木」に参加せず、また、百田が子どもの自由詩、作文にかかわる雑誌「工程」を発刊した際にも、「全く参加せず、詩と訣別」と、メモに書いている。

多分、私を含めた家族を養うための実業に、いやおうなしに精を出さざるを得なかった結果だろう。京都の北から、南の「伏見区稻荷福稻」へ突然転居したのも、そのためであった。もっとも、そこにも私たちは二年ばかりしかいなかったが、その二年間に、私は、中書島とのつきあいをつくってしまったのである。

当時、私たちの家の近くを、京都駅から中書島まで行く、単線の市電が走っていた。陸軍の練兵場のそばを通って、中書島まで行くのである。そして、私は、市電がすきであった。私は、市電の走る音を「でんでんぐっく、でんでんぐっく」といつていた。

一歳半の夏であった。私は、小さな三輪車を押して（まだ三輪車には乗れなかった）、でんでんぐっく、でんでんぐっく、と、一人旅に出たのである。暑い日ざしと、舗装されていない道の両側に茂った草の、草いきれの中を進んでいた。私は、その時、市電になっていたのである。

その挙句、私は、中書島の交番に保護された。今、地図でその距離をはかってみると、直線距

離でも四・五キロメートルはある。交番のことも、距離のことも、私はもちろん知らない。交番へとんできた父か母か、あるいはその両方が、どんなふうに私と対面し、私をひきとっていったのかも、私は知らない。きつと、泣き疲れて眠っていたのだ。距離ははじめから問題ではない。とにかく、私は市電だったのだから。

その時、大人である父と母が知っていた事実は、気がついたら、子どもの姿がどこにもなかったことと、三輪車といっしょにその子が中書島の交番に保護されていた、ということだけであり、一歳半の彼が市電になっていた間のことは、知ってはいないのである。

学問的にいって、人間の記憶というものが、どの程度の年齢にまでさかのぼって、信憑性が問われるのか、私にはわからない。しかし、四十歳の半ばを過ぎた今も、目がぎょろっと大きく、やせて、色黒い一歳半の子どもが、三輪車のうしろの下の横棒に片足をのせ、片足で土を蹴りながら、でんでんぐつく、でんでんぐつく、と、草いきれの中を行くさまが、はつきりと見える以上、それは、まぎれもなく「事実の記憶」であるといわざるを得ないのである。

最近、「馬町のトキちゃん⁽²⁾」という創作の取材のために京都へ行った時、久しぶりに中書島の界隈も歩いてみた。全面的に舗装された道には、もちろん草いきれもなく、でんでんぐつく、でんでんぐつくと三輪車を押して歩いた、一歳半の私にであうこともなかった。油懸地藏のある西